

知らないとソンする 偏差値の活用術

あこがれが見えてきたところで、自分と志望校の距離を教えてくれるのが「偏差値」です。しかし、正しい見方・捉え方を知らないと、振り回されることになりかねません。ここで基本から確認してみましょう。

「偏差値」とは？

入試にはつきものの「偏差値」。学力検査の点数が合否のカギを握る中学受験においては、ことさら重要です。「偏差値」とは学力を測るモノサシで、「首都圏模試センター」などが実施する公開テスト（模擬試験）を受験することで知ることができます。そのテストの平均点を「偏差値 50」とし、受験者の得点分布によって計算されます。おおよそ最高点の生徒は「偏差値 75」、最低点の生徒は「偏差値 30」くらいになるのが普通。こういった基準と自分の偏差値を比べることで、（公開テストの受験生の中で）自分の学力がどのくらいかを知ることができます。

なぜ、テストの「得点」ではなく、「偏差値」を使うのでしょうか。「得点」では、問題の難易度で意味がまったく変わってしまいます。同じ「60点」でも、みんなが「90点」を取るテストであれば大したことありませんし、平均で「20点」しか取れない難問であれば驚異的な成績。「60点」だけでは自分の位置も分かりませんし、自分の成績の上昇下降や教科の得手不得手も分かりません。「偏差値」は問題の難易度や教科の違いに関係なく、学力を比べることができるものです。

非常に便利な「偏差値」ですが、万能ではありません。平均値はテスト結果が「正規分布」に近いほど、信頼度が高くなります。つまり、平均点付近の人数が多く、そこから離れるほど人数が減っていくのが「正規分布」です（右の実線グラフ）。おおよそ学力テストは「正規分布」に近くなるのですが、人数のピークが2～3カ所になるなど、「正規分布」と違う結果（右の破線グラフ）になると、参考にならなくなります。

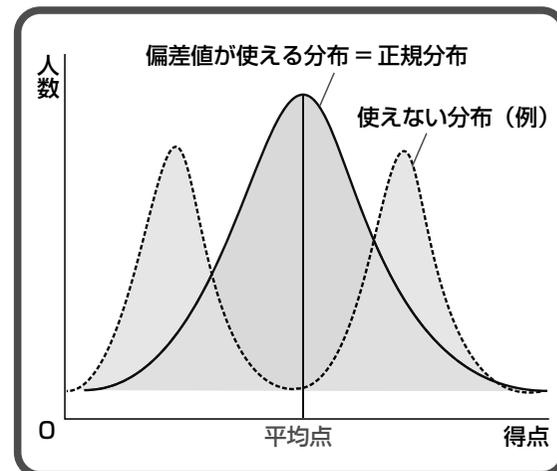
「偏差値」の見方

「偏差値 60 の学校」といったように、まるで学校を測ったような言い方も耳にしますが、これは正確

ではありません。本当の意味は「今年の同じ公開テストで『偏差値 60』だった生徒 10 人のうち、8 人が合格した学校」という意味です。

これをもとに「今の自分の成績で合格する可能性はどれくらいだろう？」と見るのが「偏差値」なのです。例えば「合格可能性 20%」だったとしても、その学校の問題と相性が良ければ本当の可能性はもっと高いかも知れませんし、逆に「可能性 80%」でも不合格の人はいるので、油断はできません。

また、「とにかく偏差値の高い学校」を目指す人もいます。しかし、「偏差値」はあくまで合格の可能性を測るモノサシですから、いくら偏差値が高くても充実した教育が行われているとは限りませんし、誰にでも合う学校というわけでもありません。例えば、たまたま有名大学への合格者が増えた学校に人気が出て、偏差値も上がるという現象がよく起こります。しかし、その学校の教育内容が変わったのでなければ、次の年も大学合格実績がいいとは限りません。その人気は一時的なものにすぎず、すぐに元に戻るかもしれません。偏差値にこだわりすぎず、学校のカリキュラムや校風などをじっくり見て選ぶ必要があるのです。



「偏差値」を正しく活用するために

さまざまに変わる「偏差値」

「偏差値」を測る公開テストにはいくつか種類があり、同じ学校であってもテストによって偏差値が異なります。「市進学院」「首都圏模試センター」の

市進学院	(40%)	(60%)	(80%)			
男子	50	55	60	65	70	75
男子			59	62	65	

首都圏模試センター	(40%)	(60%)	(80%)			
男子	50	55	60	65	70	75
男子				64	69	72

2種類の偏差値を使って考えてみましょう。上図はある中学校の偏差値例です。これを見ると、市進学院のテストでは「合格可能性 80%」の偏差値は「65」、首都圏模試センターなら「72」と、同じ学校なのに偏差値が「7」も違ってきます。これはなぜなのでしょう。

この違いは、そのテストを受けた受験生全体の特徴によって起こります。「偏差値」は受験者全体の中の位置で算出される「相対評価」。つまり、ある受験生の学力が一定でも、受験生の全体レベルが高ければ全体の中での位置は低くなり、偏差値は低く出ます。逆に全体レベルが低ければ、その中での位置は上がることになり、偏差値も高く出ます。公開テストは、実施する会社によって特徴が異なり、受験生の「層」が変わるので、偏差値も違ってきます。

「市進学院」と「首都圏模試センター」を見てみましょう。両者を比較すると、「首都圏模試センター」は受験生の学力幅が広いのが特徴です。すると平均点は低くなるので、全体の中の位置は高くなり、偏差値も高めに出来ます。問題もほかの公開テストよりも基本的なものが多く、難関校よりも中堅以下の学校を志望する生徒の学力差が正確に現れやすい公開テストと言えるでしょう。

それに比べると「市進学院」は相対的に受験者層が高くなるため、偏差値が低く出ます。難関校から中堅校を志望する生徒に高い精度の判定

ができると言えるでしょう。

また、学力レベルだけでなく、地域の影響もあります。公開テストの種類によっては、受験者の多い地域とそうでない地域の差があります。それにより、受験者の多い地域の学校人気や学校選びの志向、問題の傾向に影響されるのです。

このように、公開テストにはそれぞれ特徴があり、学力を測るモノサシとして正しく偏差値を見るためには、志望校に合った公開テストを選ぶ必要があります。また、一度決めた公開テストは、できるだけ長く受験し続け、テストの種類ごとに結果をまとめておくことです。「偏差値」は、実力の上下動を知る意味でも大事ですが、基準の違うテスト結果を混ぜてしまうと、成績の変化が掴めなくなってしまうからです。

最後に偏差値はあくまで「目安」だということを確認します。実際の入試問題は学校の思いが込められていて、解答スピード重視型から記述式に重きを置くタイプまで実に個性豊かです。公開模試の多くは、標準的な問題が中心です。ですから、公開模試の偏差値が高くても不合格のケースや、反対に模試の偏差値は低くても入試には合格するケースが毎年起こるのです。要は偏差値とは別に、本番の問題との相性や過去の問題の傾向と対策をどれほど行ったかも合否を分ける要因になるということです。